

お忙しくても、約 2 分間で読めます

山内公認会計士事務所

ハートフル・ワード (心からの言葉)

TEL 098-868-6895
FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

心のありようで人生は大きく変わる

1. 上智大学名誉教授の渡部昇一氏は、運命を高めるための心得として、幸田露伴の説いた「惜福」を挙げた。自分に舞い込んできた福を使い切ってしまうと一部をとっておく。そういう心掛けの人に幸運の女神は微笑むということである。露伴はこの「惜福」とともに、「分福」(自分の福を分け与える)、「植福」(福を新たに植える)を運命の三要諦と説いている。
2. セイコーの創業者、服部金太郎の若い頃の逸話がある。金太郎が奉公していた商店が破産しかかった。すると、金太郎は自分の預金を全部、主人の前に差し出して言ったという。「これはお店からいただいた給金の残りですから、自分で勝手に使ってはいけないと思い、貯めていたものです。それがお店のお役に立てていただけるのなら、この上の喜びはありません」。
3. この心のありようは気高いものさえ覚える。この気高さが金太郎の人生を大きく発展させた礎になったことは確かです。心のありようがいかに大きな人生の差異となるか。そのことを肝に銘じ、自らの心を高め、運命を伸ばしたいものである。
(参考:「致知」2012年10月号)

ワンポイント経営アドバイス

空洞化のウソ (その1)

松島 大輔 (タイ王国政策顧問)

1. 2005年以降、日本は、もはや実態として「貿易立国」ではなく、「投資立国」へと変貌を遂げています。つまり、所得収支が貿易収支を凌駕しているのです。そして、その貿易から得る利益と投資から得る利益の差は、201年には大幅に拡大しており、名実ともに日本は「投資立国」へ衣替えしたのです。
2. 2005年という年を境に、日本企業が国内に留まって稼ぐお金よりも、海外に進出して出稼ぎで稼いだ仕送り、海外での投資の果実の還流、こうした収入のほうが、多くなってきたという根本的な構造の変化を理解する必要があります。

(参考:松島大輔書「空洞化のウソ」講談社現代新書)

経営者のための危機管理

日本企業の行動力が劣化している理由

1. 行動こそが優位性を生む時代に、動こうとしない日本企業は、2次情報や3次情報という、現地現物のリアリズムや生気のない判断材料によって誤った意思決定を余儀なくされ、差をつけられていく。なぜ、日本企業の行動がこれほどまでに劣化したのか。
2. 早稲田大学ビジネススクール教授の遠藤功氏が「失われた20年」の後遺症だと喝破する。「終焉を迎えつつある過去50年の成長曲線にしがみついて耐え忍ぼうとする企業は、守り一辺倒。余計なことはするなどの号令のもとで、動くことが億劫になっています。しかも、とりわけ大企業の中には働かないぶら下がり社員が驚くほど増えています。
(参考:「週刊東洋経済」2012年9月8日号)

古典に学ぶ

新しい事業とは、苦難の末に成功に至るものだ

「およそ新創の事業は一直線に無難に進み行かるべきものではない。あるいはつまずき、あるいは悩み、種々の困難を経、辛苦をなめて、はじめて成功を見るものである」

(解説) 新しい事業を立ち上げたら、それが困難なく順調に発展する、と楽観してはいけない。ときに挫折し、苦悩し、困難や辛さを克服して、初めて成功を手にすることができるのだ。

(参考:渋澤健「渋澤栄一100の訓言」:日経ビジネス人文庫)